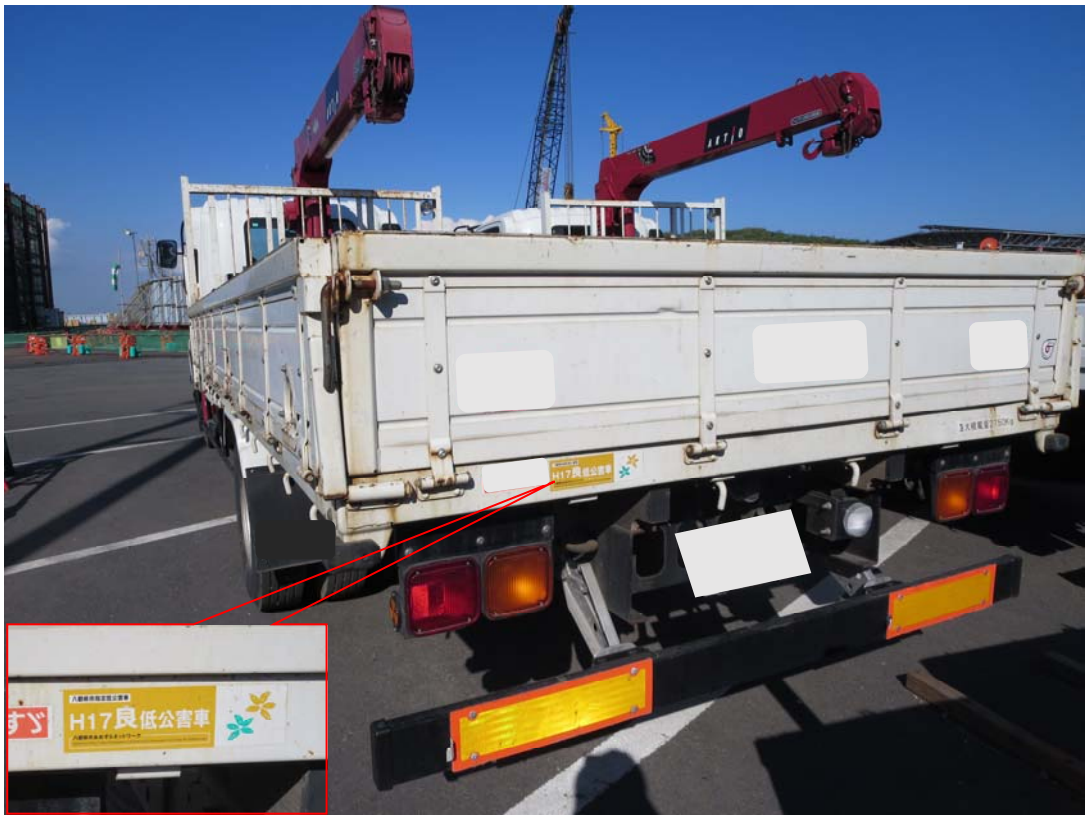


写真3-3　　低公害車の使用状況（ユニック車）

写真3-4(1)　　排出ガス対策型・超低騒音型建設機械の使用状況（バックホウ）

写真3-4(2)　　排出ガス対策型・低騒音型建設機械の使用状況（ブルドーザ）

写真3-4(3)　　排出ガス対策型・超低騒音型建設機械の使用状況
（マカダムローラー:SAKAI TW502）

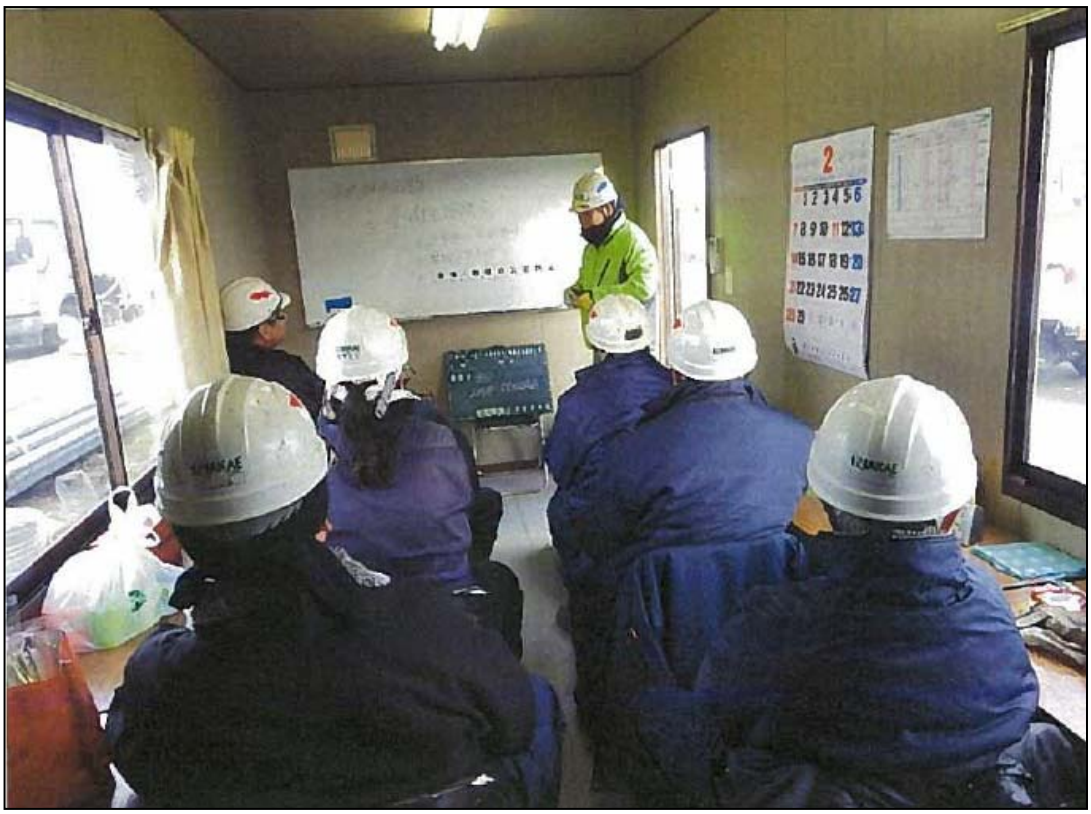


写真3-5　　環境保全に関する教育の状況（施工連絡会議開催状況）

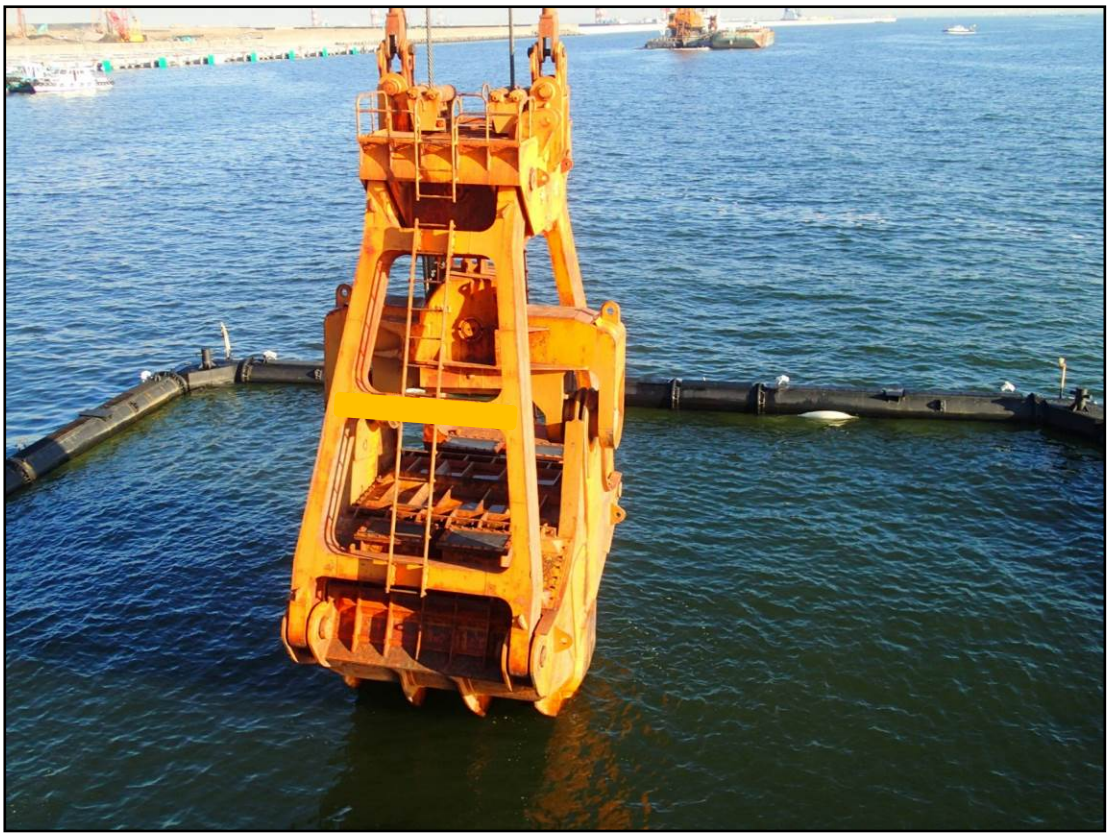


写真3-6　　密閉蓋式グラブの使用状況

写真3-7　　汚濁防止膜の設置状況

(2)評価書の予測結果と事後調査の結果との比較検討

ｱ．鳥類の生息環境の変化の程度

【事業区域内の陸域】

評価書時は、人工地が広い範囲を占めており、植生は造成地に立地したエノコログサなどの草丈の低い草本群落やヨシなどの草丈の高い湿性草本群落がみられる程度であり、タカ目、ハト目、スズメ目といった山野の鳥類が休息やねぐら、採餌場に利用する樹木は存在しなかった。事後調査時においても、評価書時と同様、人工地が広い範囲を占めており、植生は草丈の低い草本群落や草丈の高い湿性草本群落がみられる程度で、樹木は存在しなかった。

また、事後調査時は、造成地のくぼ地に、降雨等により形成された一時的な湿地（水溜り）が点在していた。湿地（水溜り）は、整地や天候等の条件により、調査時期ごとに位置や規模が変化していたが、評価書時と大きな環境の変化はないものと考えられる。

このほか、事後調査時は、岸壁工事やヤード工事に伴う建設機械の稼働がみられ、春季にはヤードの草刈りにより裸地が拡大していた。

評価書時においては、工事の施行中は人為的影響が増加するが、周辺の埋立地には東京港野鳥公園や城南島海浜公園等のより生息に適した樹林地が存在していることから、事業区域の陸域を利用する鳥類相に及ぼす影響はわずかであると予測している。

事後調査結果でも、評価書の結果と同様に、草地や裸地、湿地に生息する種が多く、目立った鳥類相の変化はみられないことから、鳥類に及ぼす影響はわずかであると考えられる。

事後調査時の生息環境の状況は、写真3-8及び写真3-9に示すとおりである。

【事業区域前面の水域】

評価書時は、事業区域前面の水域については、カイツブリ目、ペリカン目（旧コウノトリ目含む）、カモ目、チドリ目といった水辺の鳥類の休息場となっていた。

事後調査時においても、事業区域前面の水域では、カモ類やカイツブリ類が水面で休息する様子がみられたほか、造成後の岸壁上でカモメ類の休息が多く確認された。

水際部は、評価書時点は前面に消波ブロックの入った垂直護岸であったが、事後調査時点ではジャケット式の岸壁となっており、整備後の岸壁上で休息するカモメ類が多く確認された。このほか、事後調査時は、岸壁工事に伴う建設機械の稼働がみられた。

評価書では、工事の施行中は人為的影響が増加するが、浚渫工事による濁りの影響範囲は小さく、また、事業区域前面の水域以外にも水辺の鳥類の休息場がみられることから、事業区域前面の水域を利用する鳥類相に及ぼす影響はわずかであると予測している。

事後調査結果でも、評価書の結果と同様に、事業区域前面の水域で水鳥類の休息が多く確認されたことから、鳥類に及ぼす影響はわずかであると考えられる。

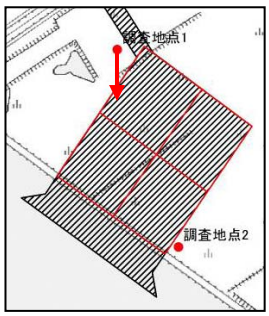
生息環境の状況は、写真3-10に示すとおりである。

秋季（平成27年10月14日）

冬季（平成28年１月28日）

春季（平成28年５月９日）

夏季（平成28年８月26日）



撮影場所

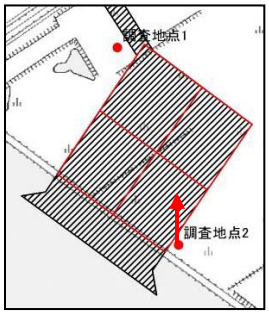
写真3-8　　調査地点１からの眺望

秋季（平成27年10月14日）

冬季（平成28年１月28日）

春季（平成28年５月９日）

夏季（平成28年８月26日）



撮影場所

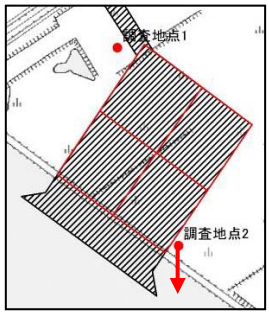
写真3-9　　調査地点２からの陸側の眺望

秋季（平成27年10月14日）

冬季（平成28年１月28日）

春季（平成28年５月９日）

夏季（平成28年８月26日）



撮影場所

写真3-10　　調査地点２からの海側の眺望

ｲ. 鳥類相の内容の変化及びその程度

評価書時の現況調査では、９目27科64種の鳥類が確認された。確認種は、草地、湿地（水溜り）、裸地等の人工地や水域を主な生息環境とする東京湾周辺で一般にみられる種が多く、樹林性の種が少ない傾向がみられた。

事後調査時の確認種数は、調査対象時期である平成27年度秋季～平成28年度夏季では11目26科65種であり、評価書時の64種と概ね同程度であった。

確認種の種構成も大きく変わらず、評価書時と事後調査時の両方で確認された種は54種であり、草地、湿地（水溜り）、裸地等の人工地や水域を主な生息環境とする東京湾周辺で一般にみられる種が多く、樹林性の種が少ない傾向がみられた。

評価書時の現況調査と事後調査結果との比較は、表3-13に示すとおりである。

評価書時の現況調査のみで確認された種（今回の事後調査で確認されなかった種）は、ホシハジロ、ミコアイサ、ムナグロ、タカブシギ、ユリカモメ、カモメ、ウグイス、ホオアカ、カシラダカ、ベニスズメの10種である。このうち、留鳥のウグイスと帰化種のベニスズメを除く８種はいずれも渡り鳥であり、飛来時期やルートの変動が大きいとみられることから、確認状況の違いは年変動によるものと考えられる。また、ウグイスは草地や低木林を主な生息環境とする種であるが、評価書時の現況調査においても確認数は少なく、元来、事業区域及び事業区域周辺における生息数は少ないとみられること、これらの生息環境にも大きな変化はないことから、本事業による影響は少ないと考えられる。

一方、今回の事後調査のみで確認された種は、ヒシクイ、ヨシゴイ、ゴイサギ、アマツバメ、イカルチドリ、ショウドウツバメの６種であり、このうちゴイサギとイカルチドリは、本州では留鳥であるが、本来の主な生息環境は河川や湖沼など内陸の水辺付近であり、海岸での確認は稀である。その他の４種はいずれも渡り鳥であることから、確認状況の違いは年変動によるものと考えられる。また、平成24年度を含む事後調査のみで確認された種は、アオアシシギ、ハマシギ、アジサシ、ジョウビタキ、アオジの５種であり、このうちアオジは主に漂鳥（国内で季節的な移動をする種）、その他の４種はいずれも渡り鳥であることから、確認状況の違いは年変動によるものと考えられる。

評価書時の現況調査及び事後調査の確認種の種数、種構成ともに大きな変化はないこと、「ｱ. 鳥類の生息環境の変化の程度」に示したとおり、鳥類の生息環境に大きな変化はみられないこと、確認種はいずれも東京湾周辺で一般にみられる種であることから、工事の施行に伴う影響は少ないと考えられる。

表3-13　　評価書時の現況調査と事後調査結果との比較

<table>
<tr><th rowspan="2">評価書時の現況調査のみで
確認された種
（平成27年度秋季～平成28年度夏季
事後調査で確認されなかった種）</th><th colspan="2">事後調査のみで確認された種</th></tr>
<tr><th>平成24年度（参考）</th><th>平成27年度秋季～
平成28年度夏季</th></tr>
<tr><td rowspan="2">ホシハジロ、ミコアイサ、ムナグロ、タカブシギ、ユリカモメ、カモメ、ウグイス、ホオアカ、カシラダカ、ベニスズメ
（10種）</td><td>オカヨシガモ、カイツブリ、セイタカシギ、ウズラシギ、ツバメチドリ、オオタカ、マヒワ
（７種）</td><td>ヒシクイ、ヨシゴイ、ゴイサギ、アマツバメ、イカルチドリ、ショウドウツバメ
（６種）</td></tr>
<tr><td colspan="2">アオアシシギ、ハマシギ、アジサシ、ジョウビタキ、アオジ
（５種）</td></tr>
</table>

ｳ. 注目される種への影響

評価書では、鳥類の注目される種への影響について、工事の施行に伴い一時的に採餌場や休息場として利用する頻度が少なくなるが、事業実施区域外の地域にも採餌場や休息場がみられることから工事の施行に伴う影響はほとんどないと予測している。

評価書時の現況調査では、８目17科32種の注目される種が確認された。

事後調査の対象時期である平成27年度秋季～平成28年度夏季では、8目16科33種が確認されており、確認種数は評価書時の現況調査と概ね同程度であった。確認種をみると、事後調査では、評価書時の現況調査と比べ４種の注目される種が確認されず、新たに５種が確認された。

評価書作成時の現況調査と事後調査結果との比較は、表3-14に示すとおりである。

評価書時の現況調査又は今回の事後調査のいずれかのみで確認された７種について、主な生息環境はいずれも草地や湿地（水溜り）、水域であり、評価書時の現況調査と事後調査時で生息環境に大きな変化はない。

また、評価書時の現況調査のみで確認された４種（今回の事後調査で確認されなかった種）のうち、ミコアイサは水域、タカブシギ及びムナグロは淡水の湿地を主な生息環境とする種であるが、いずれも渡り鳥であり、確認状況の違いは年変動によるものと考えられる。ウグイスについては「ｲ. 鳥類相の内容の変化及びその程度」の記載と同様の理由から、本事業による影響は少ないと考えられる。

一方、今回の事後調査のみで確認された種は、ヒシクイ、ヨシゴイ、イカルチドリの３種であり、このうちイカルチドリは「ｲ. 鳥類相の内容の変化及びその程度」に記載のとおり河川や湖沼など内陸の水辺付近が主な生息環境であり、海岸での確認は稀である。その他の２種はともに渡り鳥であることから、確認状況の違いは年変動によるものと考えられる。また、平成24年度を含む事後調査のみで確認された種は、アオアシシギ及びハマシギの２種であり、いずれも渡り鳥であることから、確認状況の違いは年変動によるものと考えられる。また、これらの生息環境にも大きな変化はみられないことから、本事業による影響は少ないと考えられる。

このほか、今回の事後調査では、チョウゲンボウやコアジサシ、ヒバリ等の28種が評価書時から継続して確認された。

なお、注目される種において、猛禽類では評価書時の現況調査及び今回の事後調査において同様の種が確認されており、猛禽類の生息環境についても大きな変化がないものと考えられる

表3-14　　評価書の結果と事後調査の結果との比較（注目される種）

<table>
<tr><td rowspan="2">評価書時の現況調査のみで確認された種
（平成27年度秋季～平成28年度夏季事後調査で確認されなかった種）</td><td colspan="2">事後調査のみで確認された種</td></tr>
<tr><td>平成24年度（参考）</td><td>平成27年度秋季～
平成28年度夏季</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ミコアイサ、タカブシギ、ウグイス、ムナグロ
（４種）</td><td>カイツブリ、セイタカシギ、ウズラシギ、ツバメチドリ、オオタカ
（５種）</td><td>ヒシクイ、ヨシゴイ、イカルチドリ
（３種）</td></tr>
<tr><td colspan="2">アオアシシギ、ハマシギ
（２種）</td></tr>
</table>